

群馬県における6世紀前後の鉄鏃について

杉 山 秀 宏

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

はじめに

1. 検討方法

2. 5世紀後半～末の様相

3. 6世紀初頭～前半古段階の様相

4. 6世紀前半新段階～中頃の様相

5. 遺構種ごとの鏃の変遷状況

6. 6世紀前後の鏃の全体動向

おわりに

— 要 旨 —

6世紀前後の鉄鏃の様相は複雑である。5世紀後半～6世紀中頃にかけての鉄鏃の様相について、当該時期の鉄鏃資料を集成して、その動向について検討する。その際に、古墳・祭祀・集落の3種類の遺構出土の鏃を時期ごとにその様相を比較して、当該時期の鉄鏃が遺構種ごとでどのような違いがあり、どのように変化していくのかを明らかにするものである。

検討の結果、古墳出土鉄鏃は、5世紀中頃に長頸鏃が出現した後、5世紀後半の長頸腸挟片刃鏃の盛行、5世紀後半～6世紀前半にかけての一部の鏃の小型化、仮器化の傾向が認められる。さらに、6世紀初頭～前半にかけての頸部が短頸化した短頸腸挟長三角形鏃の盛行、6世紀前半の短・長頸鏃での棘状関の出現、6世紀中頃の再度の長頸化による長頸長三角形鏃の盛行といった変遷が明らかとなった。

祭祀遺構出土鏃は、長頸鏃使用中心の構成と、無・短茎鏃が中心の構成の二者があり、特に無・短茎鏃中心の使用例は、古墳出土鏃が短・長頸鏃を中心に使用されるのに対して相異なる。また、一部大型化を示す鏃が6世紀初頭に存在する。

集落出土鏃は、前期及び6世紀後半～7世紀にかけては、無・短茎鏃が中心であるが、5世紀後半～6世紀中頃にかけては、長頸鏃の使用が認められる。この時期に導入された長頸鏃を意識して使用したと推定する。

以上、遺構種ごとに使用する鉄鏃が異なることが分かり、出土遺構の性格及びその変化に合わせた鉄鏃の選択が行われていたことが分る。

キーワード

対象時代 古墳時代

対象地域 群馬県

研究対象 鉄鏃

はじめに

2019年3月に金井東裏遺跡、2021年3月に金井下新田遺跡の報告書が出された。それら遺跡の調査報告書作成作業において、鉄器を検討していく中で、特に鉄鏃について当該時期の様相がかなり複雑であることが分かった。その複雑さを解明するために、当該時期の鉄鏃の遺構種ごとの様相の詳細を明らかにする中で、遺構種に応じた鉄鏃の在り方とその特徴を示していきたい。

1. 検討方法

分析方法としては、鉄鏃を出土した遺構から、古墳・祭祀遺構・集落と区分して遺構種ごとに出土した鉄鏃の変遷を見ていく。変遷は3段階に区分し、5世紀後半～末、6世紀初頭～6世紀前半古段階、6世紀前半新段階～6世紀中頃の3段階に区分する。この区分の中でどのように鉄鏃が遺構種ごとに変化していったのかを明らかにする。そして、他の時期の鉄鏃と比較してどのような特徴があるかを明らかにするものである。

鉄鏃は、古墳の副葬品以外に、祭祀遺構や集落(住居)からも出土している。古墳出土例が一番多いが、祭祀遺構や集落(住居)などからの出土も一定数ある。そこで、3者から出土した鉄鏃を比較して、遺構種ごとの相違や類似点について検討する。すでに金井下新田遺跡の出土鉄器の考察(杉山2021)で一部試みているが、再度検討した結果を提示する。なお、古墳については、墳形と墳丘規模などを基に大型古墳(前方後円墳及び20m以上の大型円墳)と小型墳(20m未満の古墳)に細分して比較検討する。

次に、各時期での特徴的な鏃の変化を明らかにする。当該時期は鏃の変化の幅が大きく、形態・大きさともに大きく変化している。この変化の在り方を、遺構種ごとに整理していく。

以上のような方法で、5世紀後半～6世紀中頃の遺構種ごとの鉄鏃の動向を検討し、その特徴について明かにするものである。

2. 5世紀後半～末の様相

大型古墳例

鶴山古墳(右島・石川1986右島1988～1996)(第1図1～10) 5世紀後半を遡る5世紀中頃の前方後円墳例として鶴山古墳例がある。長頸鏃導入の重要な古墳として取り上げる。鶴山古墳は、全長102mの前方後円墳で、竪穴系の副葬品収納施設が検出された。武器・武具類(長方板革綴式短甲・横矧板鋌留式短甲・小札鋌留眉庇付冑・小札鋌留衝角付冑・頸甲・片甲・革盾・剣・刀・鏃)、農工具(曲刃鎌・鉋・斧・刀子・針・鑿)、石製模造品(斧・手斧・鎌・刀子)、鏃が出土している。

鏃は総数91以上出土している。長頸鏃導入の先駆例である。頸部は、短いものも含まれているが、基本的に長頸となった資料である。頸部が極端に伸びた、渡来系の

形態を有する頸部長8.5～9cmの長頸圭頭鏃(3・4)が7点、頸部長3.5～5.4cmと頸部が短い長頸柳葉(長三角形)鏃(10)が4点以上、長頸で6.6～10.6cmと頸部が長い長頸柳葉(長三角形)鏃(7～9)が約30点以上、片方のみ逆刺を持ち片方が斜閎を有する頸部長9～10cmの長頸段違片腸挟鏃(5・6)が数本出土している。これらの長頸鏃の一群は、石室外からそれぞれの型式ごとにまとまって出土した。また、類例が非常に少ない長身化した刃長11.5～12.5+cmを有する2段逆刺の片刃鏃(2)が10点出土している。短茎の腸挟長三角形鏃(1)も5点あり、この2種類は、石室内から出土している。短茎鏃と大型平根で2段逆刺の片刃鏃という装飾的な鏃が石室内部で出土し、石室外部で実用性の高い長頸鏃が配置されていることは、右島も指摘しているように、鏃の用途を考える上で参考になるものである。

この資料群は、長頸鏃の出現を示す良好なセットとあって良く、これらの5世紀中頃に位置する鏃の後に、定型化した5世紀後半の長頸鏃が定着するのである。

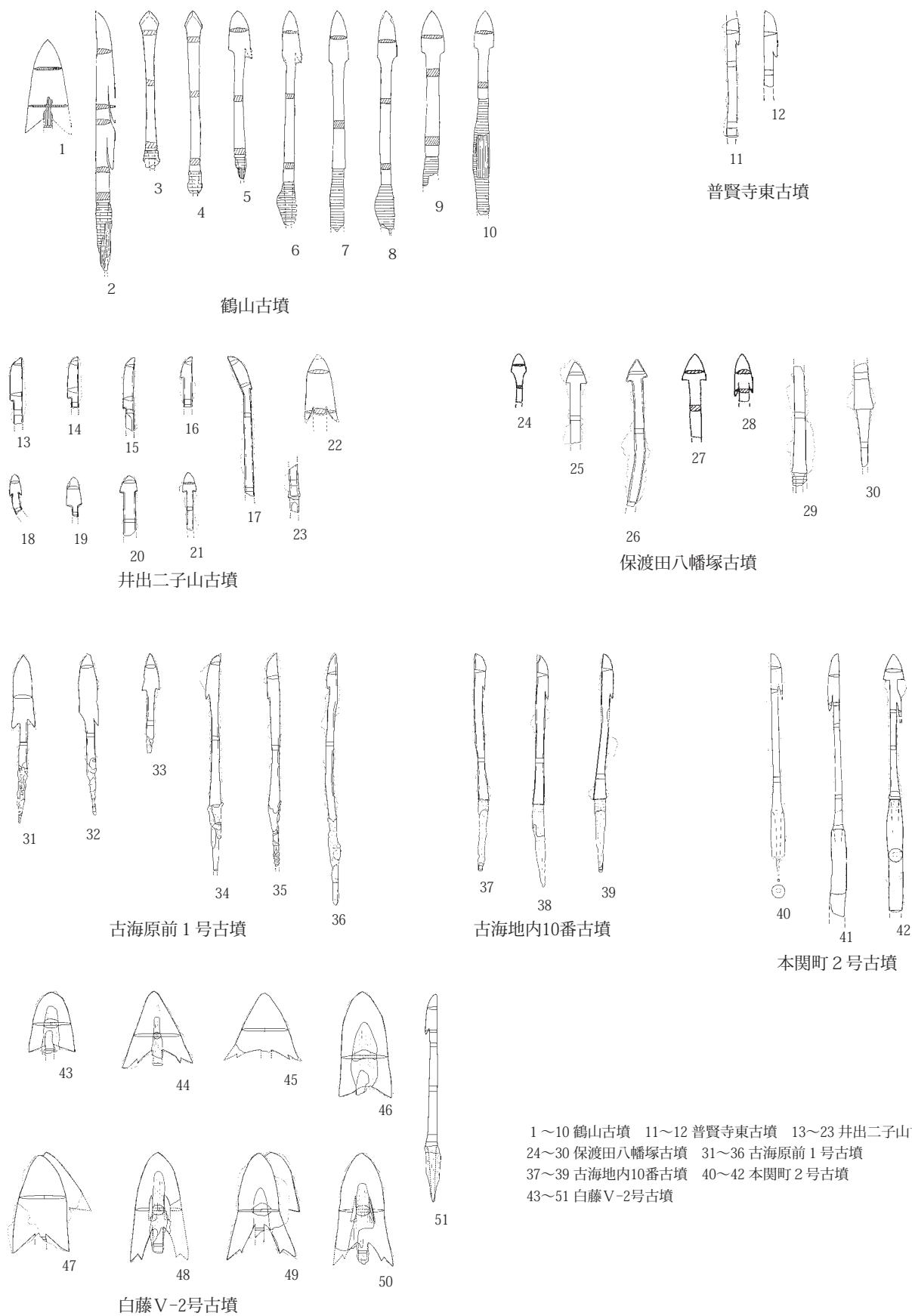
普賢寺東古墳(右島1999)(第1図11・12)

直径30mの円墳である。主体部は竪穴系石室の可能性が高い。眉庇付冑、小札甲、鉄地金銅張f字形鏡板付轡、金銅製杏葉、鉄製馬具、直刀、鎌、斧が出土している。複数の逆刺を有する片刃鏃(11・12)が出土している。破片資料が多いが、頸部は7cmという長頸鏃に比定すべき長さには届く長さで、長頸化した片刃鏃である。5世紀後半と推定する。

井出二子山古墳(若狭・石橋2009)(第1図13～23)

全長108.5mの前方後円墳で、舟形石棺を礫で覆う埋葬施設を持つ。盗掘が激しいが残存している副葬品を見ると、装身具(冠帽・履類・玉類)、武器・武具(小札甲・衝角付冑・胡籐・銀装刀・鉋・鏃)、馬具(轡鏡板・銜・鞍・杏葉・雲珠・辻金具)、農工具(ミニチュア農工具)、紡輪、滑石製模造品が出土している。

鏃は、長頸腸挟片刃鏃(13～17)が中心となる。18点の鏃があり、刃長が1.49～3.5cmあり、4分類されている。うち、A類の刃長2.8～3cmの類例が多く、中心となる。また、小型化したおそらく短頸と想定される腸挟長三角形・三角形鏃(18～21)が6点出土している。いずれも極めて小さい刃部であり、頸部も細いものが多いので小型短頸化した一群の鏃の始まりと推定する。さらに、平根鏃に近いやや幅広の刃部を持つ恐らく短頸と推定する腸挟長三角形鏃(22)も2点含まれている。この類の鏃は古海原前1号墳の短頸腸挟長三角形鏃(31)に近いものである。共伴する須恵器はTK23・47型式平行期に比定される。5世紀後半に比定される鉄鏃の構成を知ることができる重要な資料である。



第 1 図 鉄鍬の構成①

保渡田八幡塚古墳(若狭2000)(第1図24~30)

全長96mの前方後円墳で、舟形石棺を礫で覆う埋葬施設である。主体部の副葬品は盗掘されていたが、石棺脇の副葬品埋納施設中から農工具(鍬鋤先・斧・曲刃鎌・鉈・鑿)、武器(飾弓(弓飾鉾)・鏃)、馬具(絞具)が出土した。また、第2主体部(竪穴式石槨)から出土したものと及び可能性のあるものとして、武器・武具(飾弓(弓飾鉾)・鏃・小札甲・(伝八幡塚 大刀))、馬具((伝八幡塚 剣菱形杏葉))が出土している。

鏃は12点の刃部が出土している。多くが小型化した短頸三角形・長三角形・腸挟長三角形鏃が主体である。角関を呈するのが通常で、三角形鏃(25・26)は7点、長三角形鏃(24・27)が4点で、うち1点は撫関である。腸挟長三角形鏃(28)が1点ある。すべての鏃の刃部も極めて薄い平造りのものが中心で、一部が片丸造である。このような小型化した理由として鏃形模造品として製作した可能性もあると考えられるものである。^{註1} 井出二子山古墳からはじまる小型化が継続しているのが特徴である。頸部長は、遺存しているものからすると、5.6~6.3cmほどあり、長頸鏃とまでは言えない短頸鏃に含まれると推定する。鏃身関は、台形関であり急激に開くものではない。

古海原前1号古墳(石関・橋本1986、関本2016)(第1図31~36)全長37mの帆立貝式古墳。4主体部が上下に重なる。副葬品は、第2主体部から画文帯画像鏡・直刀、最下部の粘土槨の第4体部から、銀装振文環頭大刀・鏃・刀子・鎌・小型農工具が出土している。第4主体部からは22本の鉄鏃が出土した。平根有頸片腸挟柳葉鏃(32)4点、平根有頸腸挟柳葉鏃(31)7点、頸部長2.4~3.2cmの短頸腸挟長三角形鏃(33)2点、頸部長7.2~9.0cmを有する長頸腸挟片刃鏃(34~36)11点の構成である。この時期を代表する長頸腸挟片刃鏃が中核となり、平根系の鏃として腸挟柳葉鏃と片腸挟柳葉鏃や、短頸の腸挟長三角形鏃などは、新しい要素であり、5世紀後半でも末に近い鏃である。

小型古墳例

古海地内10番古墳(石丸・関本2012)(第1図37~39)基壇を含む全長30mの円墳であるが帆立貝式古墳の可能性もある。3つの主体部が検出され、その第3主体部の礫槨内にあった箱形石棺から鏃は出土した。副葬品は、装身具(管玉・ガラス玉・竪櫛)、武器(勾革飾り金具付大刀・鏃)、工具(刀子)が出土した。鏃はすべて長頸腸挟片刃鏃(37~39)である。頸部は7.2~8.0cmを呈する。当該時期に盛行した長頸腸挟片刃鏃のみで構成されたもので5世紀後半に比定される。

本関町2号古墳(中里2011)(第1図40~42)

径約12mの円墳である。粘土槨の中に組合式木棺が収められている。副葬品は、武器・武具(横矧板鉾留短甲・

直刀・鏃)、工具(曲刃鎌・斧・U字形鍬鋤先)、鐻子が出土した。鏃は21点が出土した。この時期の特徴的な鏃である長頸腸挟片刃鏃(40・41)は14点出土しており、頸部は、9.0~12.65cmと長めのものが多い。特徴的な厚みがある大型で、頸部長8.3~12.5cmと長大な頸部を有する独立片腸挟長頸腸挟長三角形鏃(42)が出土している。この類の鏃の群馬県での最古の鏃となると推定する。1本のみ長頸柳葉鏃が出土しているとされるが、独立片腸挟長頸腸挟長三角形鏃である可能性がある。横矧板鉾留短甲・直刀などの武器武具、U字形鍬鋤先・斧・曲刃鎌などの農工具や半島系の遺物として注目される鐻子なども出土している古墳で、墳丘規模に比して豊富な副葬品に特徴がある。5世紀後半に比定される。

白藤V-2号古墳例(小島純一1989)(第1図43~51)

径19mの円墳である。長方形土坑に長3.25m、幅1.2mの埋葬施設を設置し、白粘土で被覆している。副葬品は、剣1、胡籙1、鏃16以上、刀子1、提砥1、剣形石製模造品3が出土した。逆刺を持つ頸部長8.2cmの長頸片刃鏃(51)が8点以上あり、短茎の逆刺を持つ三角形、長三角形鏃(43~50)が8点出土しており、共伴する胡籙金具の出土と併せて、儀礼鏃としてのセットを示しているものと思われる。以上のように、この時期の古墳は、典型的な長頸鏃が中心となるとともに、その長頸鏃の中でも長頸片刃鏃が中心となるものである。無・短茎鏃も儀礼矢としてのセットも前期からの継続で引き続いてある。5世紀後半に比定される。

祭祀遺構 Hr-FA下で、ある程度の黒色土の覆土が被せられていたと想定する金井下新田遺跡5区1号竪穴建物や宮田諏訪原遺跡1区1号祭祀遺構の祭祀遺構がある。

金井下新田遺跡5区1号竪穴建物周堤(小島敦子他2021、杉山2021)(第2図1)周堤内部から出土した住居祭祀に伴うと推定する鉄製品3点のうち、1点が長頸柳葉(長三角形)鏃(1)である。この鏃は、鋒を周堤の下部で、周堤の長軸方向に対して直交する北に向けている頸長8.5cmを有する大型長頸鏃である。長頸片刃から長頸柳葉(長三角形)鏃へ主要鏃が変化する最初の段階のものである。古墳副葬品として納められるような大型鏃である。5世紀末に比定できる。

宮田諏訪原遺跡1区1号祭祀遺構(小林2005)(第2図2~5) Hr-FA直下とは言えない遺構もあり、5世紀後半でも5世紀末に近い時期に比定できるものである。逆刺を持つ頸部長7.5~9.6cmを有する長頸片刃鏃(4)が中心で、それに頸部の長さは不明だが、独立片腸挟を持つもの(5)や、無・短茎の鏃(2・3)が出土している。鏃の様相では古い形態を示す。特に逆刺を有する長頸片刃鏃を中心とするところは、古墳・集落例を見ても5世紀後半の特徴を示しているものとして良い。

集落遺跡 荒砥三木堂遺跡 I 区12号竪穴建物(石坂1991)(第2図6)、金井下新田遺跡1区6号竪穴建物(第2図7)、金井下新田遺跡1区16号竪穴建物(第2図8)(小島敦子他2021, 杉山2021) いずれも長頸片刃鏃が出土しており、いずれも逆刺を持つ長頸腸挟片刃鏃である可能性がある。古墳と同じように長頸腸挟片刃、長頸片刃鏃が中心となる構成である。

3. 6世紀初頭から前半古段階の様相

6世紀初頭から6世紀前半の古段階が対象となる。大型前方後円墳の例として、築瀬二子塚古墳と前二子古墳例がある。両古墳ともに初期横穴式石室でその造りは細長い羨道を持つなど共通する部分も多い。

大型古墳例

築瀬二子塚古墳(大工原・志村他2003、杉山2016)(第2図9～14) 全長80mを有する前方後円墳で、全長11.54m、玄室長4.07m、羨道長7.47mの羨道部が非常に長い両袖横穴式石室がある。群馬でも最古の両袖横穴式石室として良い。副葬品は、装身具(勾玉・管玉・算盤玉・切子玉・棗玉・丸玉・ガラス小玉・金層ガラス3連玉・金銅製空玉・垂飾付耳飾)、武器(銀製振素環頭大刀・金銅製三輪玉・鉾・飾弓(弓飾鉾)・鏃)、馬具(鉄地金銅張花弁形杏葉・木芯鉄板張壺鐙・鉄地金銅張辻金具・鞍縁金具ほか)、工具他(鹿角装刀子・刀子・鉋・釣針・針)、石製模造品(鏡・短甲・盾・鏃・剣・刀子・斧・鎌・有孔円板)、白玉が出土している。

鏃は3種類出土していて、総計40点ほど確認できている。短頸段違腸挟長三角形鏃(13・14)が、左右に長さが長い辺が変わり、左側が長くなるものが3点、右側に長くなるものが6点ある。短い刃部からの頸部長5.3cmを呈するこれらの短頸段違腸挟長三角形鏃には、鏃身関下部に有機質の円柱状の飾りが付く。円柱状の飾りは総数10点ほど出土し、基本的にこれら短頸段違腸挟長三角形鏃に伴うものである。この様な円柱状の装具を装着される鏃は後述する少林山台12号墳例に近似するものが出土し、鹿角製装具の鏃が金井東裏遺跡1号人物脇から出土しており、極めて儀器的要素の強いものである。短頸腸挟長三角形鏃(11・12)はこの時期を代表する鏃で、頸部長は3.7cm以上あるものである。ほぼ同時期の他の古墳からも良く出土する鏃である。また、扁平薄手の刃関が斜関で、刃部長が左右で異なる鏃で頸部長5.4cm以上となる特異な短頸長三角形鏃(9・10)が出土している。左側の刃長が長くなる例が7点、右側の刃長が長くなる例が2点の計9点である。後述する前二子古墳の鏃形品につながる系統のものと推定している。共伴する須恵器は、MT15型式並行のものである。時期的には前二子古墳より若干遡る。

前二子古墳(前原1993、前原・杉山他2015)(第2図15～17) 全長93.7mの前方後円墳で、全長13.9m、玄室

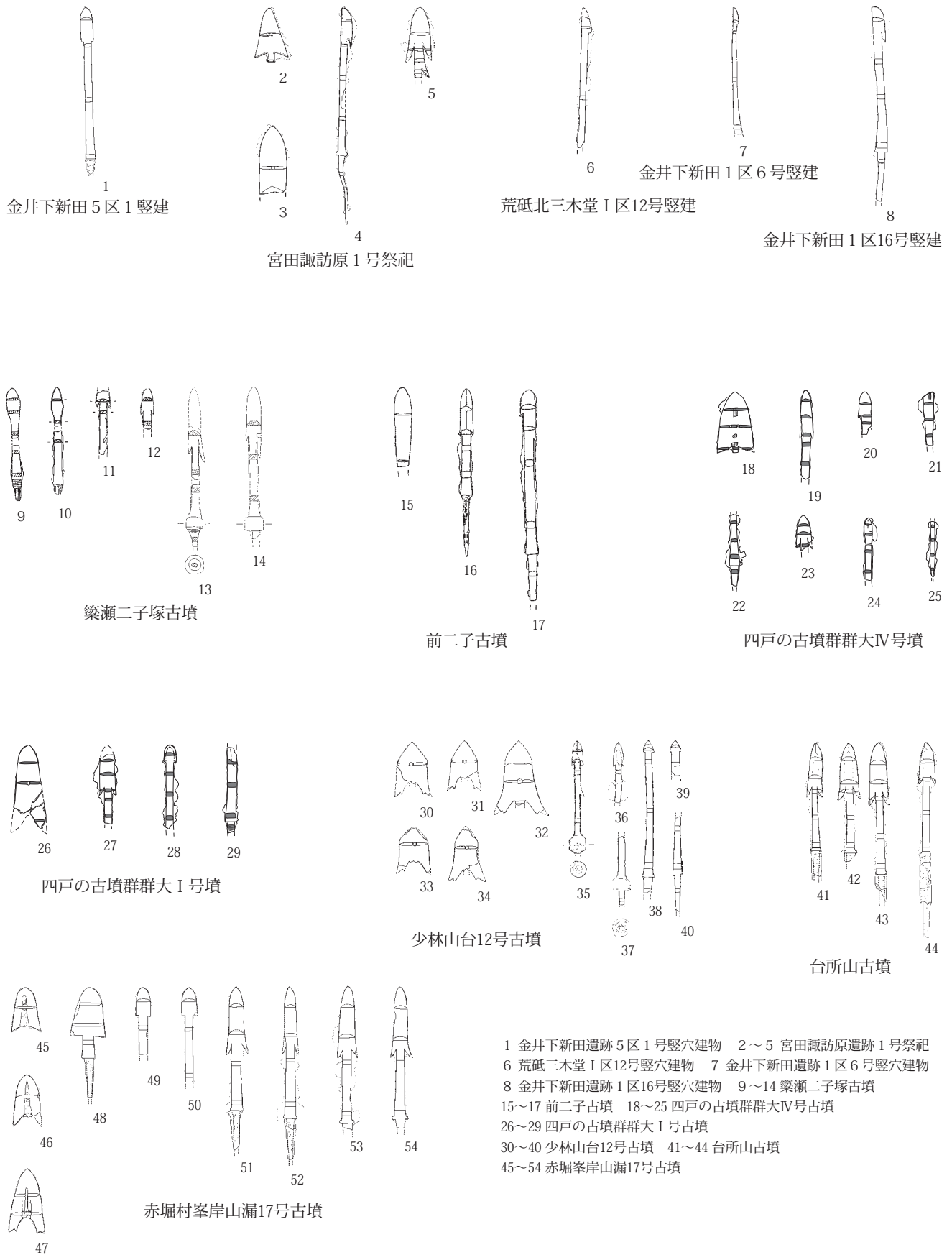
長5.2mの初現期の両袖横穴式石室を持つ。副葬品として珠文鏡、装身具(金製耳環・銀製空玉・管玉・ガラス玉)、武器(鉾・鏃)、馬具(金銅製剣菱形杏葉・金銅製双葉剣菱形杏葉・f字形鏡板付轡・留金具)、須恵器・土師器類一括が出土している。

鏃は、短頸腸挟長三角形鏃(16) 82点、長頸段違腸挟三角形鏃(17) 33点、扁平長三角形鏃形品(15)が3点出土している。頸部長が3.95～5.15cmの短頸腸挟長三角形鏃は、当該時期を代表する鏃であり、この鏃が中心となる。頸部長9.30～10.60cmの長頸段違腸挟長三角形鏃は、左右の逆刺の長さが異なる鏃で、一見、独立片腸挟鏃と近似するが、系統としては別系列と想定される。この時期を初現期とする鏃である。いずれも鏃身関は、端部が広がるが、棘状関は認められ無い。興味深いのは、扁平な板状品で、刃先が尖るも、刃部の作り出しは弱く鏃形品とでも呼ぶべきとして、扁平長三角形鏃形品(15)と呼称したものがあある。前述した築瀬二子塚古墳でも扁平薄手で様相としては近い短頸長三角形鏃が出土しているが、さらに儀器化したものである。この時期に特徴的な鏃形品で、祭儀的な要素を持つものとして捉えることができる。Hr-FA降下後の棘状関の出現前の6世紀前半を代表する古墳である。共伴する須恵器は、MT15型式並行のものである。

小型古墳例

四戸の古墳群群大IV号古墳(藤岡1969・1981, 杉山2020)(第2図18～25) 径約8mの円墳で、全長4.21mで幅が0.7mの狭長な無袖横穴式石室を有する。埋葬部は1.99mである。盗掘されていたが、副葬品は、装身具(銀製環・管玉・切子玉・棗玉・ガラス玉など)、武器(直刀・鉾・飾り弓(弓飾鉾))工具(刀子・鑿・鉋・錐)、馬具(辻金具)が出土している。鏃は、短茎腸挟長三角形鏃(18) 1点、短頸腸挟長三角形鏃(23) 2点、長頸腸挟長三角形鏃(19) 2点、長頸段違腸挟長三角形鏃(20)が3点出土している。前述したように短頸腸挟長三角形鏃はこの時期に特徴的な鏃で、段違腸挟長三角形鏃は、長頸化したものが、前二子古墳から出土している。長頸鏃には棘状関は認められない。築瀬二子塚古墳例や前二子古墳例の鏃との近似性から6世紀前半と推定する。

四戸の古墳群群大I号古墳(藤岡1969・1981、杉山2020)(第2図26～29) 径約10mの円墳で、全長5.97m、玄室長2.45mの無袖横穴式石室である。盗掘されていたが、副葬品は、装身具(管玉・切子玉・ガラス玉・漆玉など)、武器(直刀・鏃)、工具(刀子・鉋)が出土した。鏃は、無茎腸挟長三角形鏃(26) 1点、長頸長三角形鏃(28) 2点、短頸腸挟長三角形鏃(27) 2点が出土している。長頸鏃には棘状関は認められない。無・短茎鏃と長頸鏃・短頸鏃の組み合わせは、少林山台12号、四戸IV号墳に共通するものである。長頸長三角形鏃は、恵下古墳例や久保遺跡



- 1 金井下新田遺跡 5 区 1 号 豎穴建物 2～5 宮田諏訪原遺跡 1 号 祭祀
 6 荒砥三木堂 1 区 12 号 豎穴建物 7 金井下新田遺跡 1 区 6 号 豎穴建物
 8 金井下新田遺跡 1 区 16 号 豎穴建物 9～14 築瀬二子塚 古墳
 15～17 前二子 古墳 18～25 四戸の古墳群 群大 IV 号 古墳
 26～29 四戸の古墳群 群大 I 号 古墳
 30～40 少林山台 12 号 古墳 41～44 台所山 古墳
 45～54 赤堀村峯岸山漏 17 号 古墳

第 2 図 鉄鏃の構成②

例から出土するもので、6世紀前半でもⅣ号墳に比べて少し新しいものと推定する。

少林山台12号古墳(飯塚・徳江1993)(第2図30～40)

径11mの円墳で、全長7.2m、埋葬部長3.1mの無袖横穴式石室である。副葬品は、素環鏡板付轡、木装壺釧と鏃が約15点、須恵器が出土した。築瀬二子塚古墳から出土したものと近似する鏃身関下に有機質の円筒キャップ状の飾りを持つ頸部長5.3cmの短頸独立片腸挟鏃(35～37)が3点確認できた。他に、刃先先端が極端に小さい角関を有する片丸造の頸部長9.1cmの長頸三角形鏃(38～40)が4点出土している。なお、有機質の円筒キャップ状の飾り装具は総計7点確認できており、長頸三角形鏃は装具の付いていない例が確認できている。装具付の鏃の鏃身は、やはり独立片腸挟鏃のものが対応する可能性が高い。いずれも棘状関が存在する。完全に長頸化に戻った頸部長9cmを超える鏃の存在などから、6世紀前半と推定する。共伴する須恵器は、MT15型式並行のものである。

台所山古墳(村井・本村1983)(第2図41～44)

径15mの円墳で、長約1.7m、幅約50cmの舟形石棺状の主体部で、粘土や礫が棺下に敷かれていたと報告されている。乳文鏡、管玉、鉄器は素環頭大刀、直刀、亀甲繫単鳳文象嵌円頭大刀、槍、刀子、斧、轡、辻金具などが出土している。鏃は、短頸腸挟長三角形鏃(41～44)で、頸部4.6～6.0cmで、計20点以上出土している。頸部7cmを超える長頸化に戻らない段階での鏃と捉えられる。棘状関が確認できるものがあり、既に棘状関が出現していることを示している。6世紀前半に比定される。

赤堀村峯岸山漏17号墳(松村1976)(第2図45～54) 径約16mの円墳で、全長4.88mの竪穴式石槨である。副葬品は直刀1、小刀片2、水晶製三輪玉4、曲刃鏃1、鏃26などが出土している。鏃の中心は頸部長5.1～5.4cmの短頸腸挟長三角形鏃(51～54)が多数出土している。当該期の標準モデルである。他に頸部長4.8cm+の短頸の可能性の高い長三角形鏃(49・50)が2点、無茎平根重挟長三角形鏃(47)1点、無茎平根腸挟長三角形鏃(45・46)2点が出土している。短頸腸挟長三角形鏃は棘状関を有している。6世紀前半の棘状関が形成される良好な資料である。

権現山2号古墳(横澤1981)(第3図1～6)

径8.6mの円墳で、全長2.73m、埋葬部長1.83mの無袖のL字(くの字)形の変形横穴式石室である。副葬品は、管玉・ガラス小玉、直刀、刀子、鏃13、須恵器が出土した。鏃は錆化がひどいが、鏃に厚みがある。いずれも、頸部長7cmを超える長頸三角形鏃(1～5)が中心となる。計13点確認できたが、刃部を確認できたのは4点

である。いずれも長頸三角形鏃である。弱いながら棘状関を確認できた。短頸腸挟長三角形鏃を持たず、全て

長頸化した棘状関を持つ鏃であることから6世紀前半の古墳である。出土した須恵器はMT15型式並行に比定されるものである。

下郷古墳群71号古墳(大塚・石井2016)(第3図7～11) 長径11.6m、短径8mの楕円形の積石塚である。全長5.9m、玄室長3mの無袖横穴式石室である。副葬品は、装身具(管玉・切子玉・棗玉・琥珀玉・算盤玉・ガラス玉など)、武器(直刀・飾り弓(弓飾鉾)・鏃)、馬具(素環鏡板付轡・四隅突出四橋状辻金具)、工具(刀子)が出土している。鏃は、刃から33本以上出土していることが分る。頸部長6.7～11.3cmの長頸腸挟長三角形鏃(7～9)は17点、頸部長7.7～9.15cmの長頸長三角形鏃(10・11)は7点あり、刃型式不明が9点ある。いずれも長頸鏃の長三角形で、頸部は7cmをほぼ超えており、逆刺を持つものと無いものの2者がある。逆刺を持つもののほうが主体である。鏃身関は台形関で棘状に近い形態を有するものが認められる。Hr-FA降下後に構築されていることが断面観察で分かった例で6世紀前半の好例である。

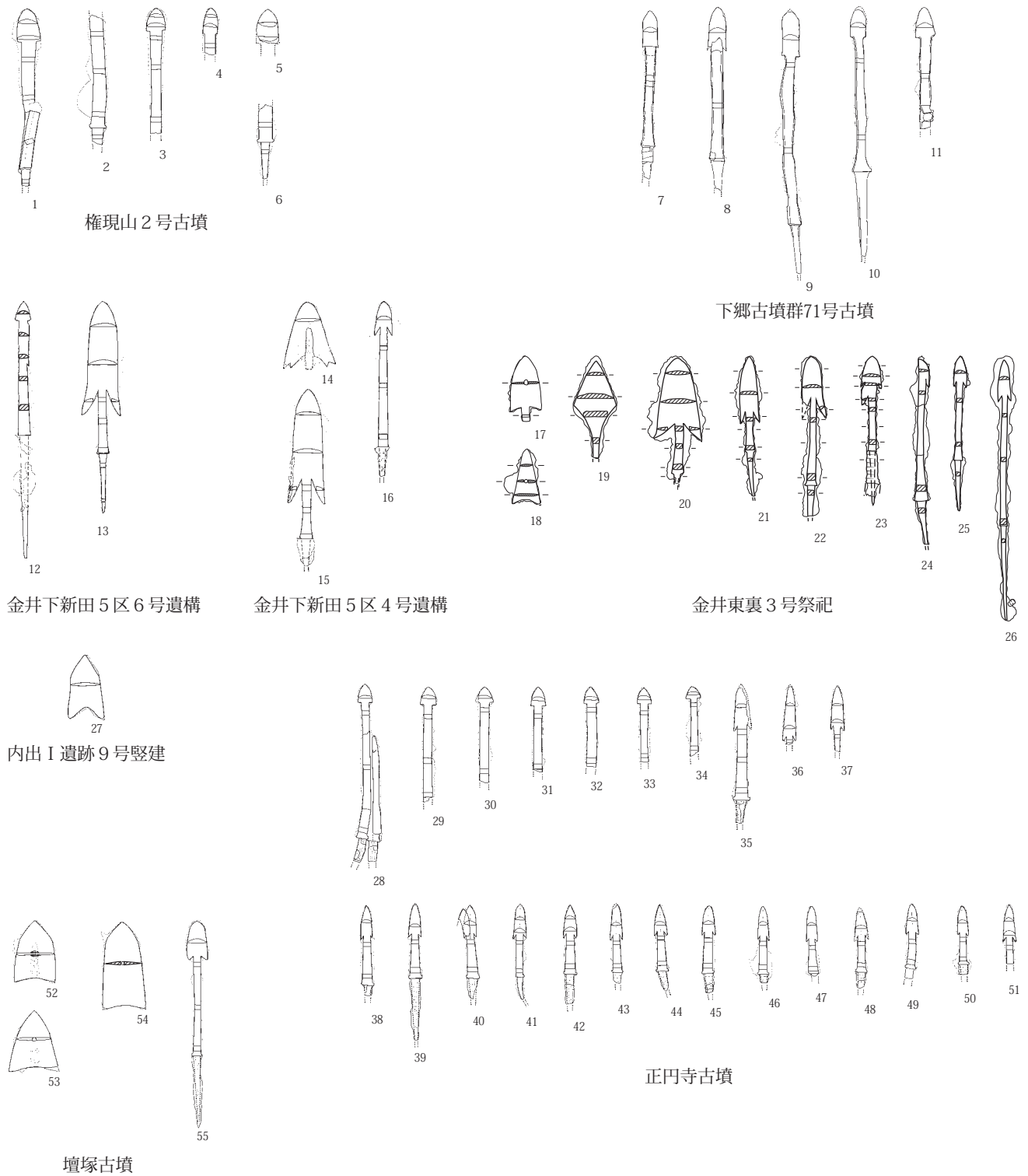
以上6世紀前半では、長頸腸挟片刃鏃が急激に少なくなり、頸部が短くなる短頸腸挟長三角形鏃が主体となるものである。棘状関が6世紀前半には出現する。また、仮器化し形骸化したものがある。これは儀器化した鏃と捉えることが出来る。

祭祀遺構

金井下新田遺跡5区4号遺構(小島敦子他2021,杉山2021)(第3図14～16) 鏃の完存品が3点出土しており、それぞれ形態が異なり、平根有頸腸挟長三角形鏃(15)・長頸腸挟長三角形鏃(16)・短茎重挟長三角形鏃(14)が1点ずつ出土している。特に平根有頸腸挟長三角形鏃は、その大きさが特異で、後に述べる5区6号遺構と比較して、ほぼ同形同大の大型平根鏃であり、重要な鏃である。金井東裏遺跡3号祭祀遺構にも1例あり、このような大型の鏃を選択して祭祀遺構に埋納するという行為をしたものと想定する。長頸腸挟長三角形鏃は後述する3号祭祀遺構でも最も多く出土した鏃で、5世紀後半に隆盛した長頸腸挟片刃鏃に代わる鏃として捉えられるものである。

金井下新田遺跡5区6号遺構(小島敦子他2021,杉山2021)(第3図12・13) 先述した4号遺構出土の平根有頸腸挟長三角形鏃(13)が出土している。さらに、長頸独立片腸挟長三角形鏃(12)も7.8cmの頸部を有する大型の鏃である。この6号遺構では、大型の有袋鉄斧も出土しており、鏃も含めて大型化した鉄製祭具を納めるという特徴があったものと想定している。

先行する宮田諏訪原遺跡1区1号祭祀遺構及び、同時期の金井下新田遺跡5区4号・6号遺構ではいずれも、長頸鏃を中心にした構成である。



1～6 権現山古墳 7～11 下郷古墳群71号古墳 12・13 金井下新田5区6号遺構
14～16 金井下新田5区4号遺構 17～26 金井東裏3号祭祀遺構
27 内出I遺跡9号竪穴建物 28～51 正円寺古墳 52～55 壇塚古墳

第3図 鉄鏃の構成③

金井東裏3号祭祀遺構(杉山・大木他2019)(第3図17～26) 約900個の土器と総数1万点を超える祭具が出土している。183点もの鉄器が出土しているが、その中で鍬が、土中及び一部杯内部から65点もの多数出土しており、全鉄製品中36%もの多数を占め、鉄器類の中では一番比率が多い。鉄鍬の型式の内訳は、無茎腸扶長三角形鍬(18) 11点、短茎腸扶長三角形鍬(17) 18点、平根圭頭鍬(19) 1点、平根腸扶長三角形鍬(20) 1点、長頸腸扶片刃鍬(24) 6点、長頸腸扶長三角形鍬(25・26) 12点、短頸腸扶長三角形鍬(21・22) 3点、短頸独立片腸扶腸扶長三角形鍬(23) 1点、不明2点の内訳である。基本的に逆刺を持つものが中心である。無・短茎の鍬は30点と全体の46%を占め、平根系統の鍬が少数で2点と3%、長頸鍬は、計18点で28%、短頸鍬は、計4点で6%である。いずれも棘状関は認められない。無・短茎鍬群が全体の半分近くを占めることからこの祭祀遺構での中心は無・短茎鍬群となることは明白である。長頸鍬は、逆刺を持つ長三角形鍬が中心で、それに同じく逆刺を持つ片刃鍬が続く。短頸の逆刺を持つ長三角形鍬に独立片腸扶短頸三角形鍬が付随する。長頸鍬が主体で、頸が短くなった短頸鍬が共伴するものである。注目すべきは、平根有頸圭頭鍬で、関東地方ではほとんど類例が無いものである。平根有頸腸扶長三角形鍬は、先述したように大型化した鍬として祭祀遺構の中では重要な鍬である。また、古墳出土の鍬に比べて少し小型化したと思われる鍬もいくつかあることも特徴である。以上、金井東裏遺跡3号祭祀遺構では明瞭な無・短茎鍬群が中心で、大型化・小型化した鍬も含まれる構成となる。

集落遺跡

内出I遺跡9号竪穴建物(伊藤ほか1992)(第3図27)

無茎腸扶長三角形鍬(27)が1点出土している。6世紀初頭に比定される。

4. 6世紀前半新段階～中頃の様相

6世紀前半の新段階から中頃にかけての資料である。

大形古墳例

正円寺古墳(尾崎1971、松本1981)(第3図28～51) 全長70mの前方後円墳である。両袖横穴式石室を有する。盗掘されていたが、副葬品として、直刀片、鍬が出土している。鍬は、刃部が小型の三角形で、頸部長9cmほどの長頸三角形鍬(28～34)が20点ある。さらに、頸部長5.1cmの短頸腸扶長三角形鍬(35)が1点以上ある。長頸鍬については、7cm以上の鍬で、完全な長頸鍬の長さに戻っている。以上の2種類の鍬ともに棘状関を有する。特徴的なのは、刃長2.0～3.5cmの刃部と頸部長2.2～3.4cmという小型化した短頸腸扶長三角形鍬(38～51)が14点以上ある。今まで井出二子山古墳や保渡田八幡塚古墳で出土した小型化した鍬に系統のつながるもので、小型化した刃と頸部であるが、棘状関を持つと判断した。

すべての鍬に棘状関を持つということなどから時期的には、6世紀前半でも中頃に近いものと想定する。

壇塚古墳(尾崎1950・1958)(第3図52～55)

径25mの2段築成の大型円墳で、全長7.42m、玄室長4mの片袖横穴式石室を持つ。副葬品は、装身具(耳環・玉類)、武器(直刀・小刀・飾り弓(弓飾鉾)・鍬)、工具(刀子)が出土した。鍬は、無茎平根浅扶長三角形鍬(52～54) 3点、頸部長6.8cmの長頸腸扶長三角形鍬(55) 1点、長頸鑿箭鍬1点の5点確認できた。また、弓飾鉾が3点確認できている。いずれも長頸鍬は明瞭な棘状関を有するもので、石室の構造と併せると6世紀中頃が想定される。長頸鑿箭鍬の存在から7世紀代追葬が想定される。

洞山古墳(尾崎1951・1981)(第4図1～15)

全長22mの小型前方後円墳である。全長5.6m、埋葬部長3.3mの無袖横穴式石室と推定される。

床が2面確認され、上面では大刀1、鉄鍬7、下面からは勾玉3、管玉8、丸玉5、銅製玉3、小玉108、鈴杏葉3、轡1、刀子2、鍬27が出土した。

鍬は、上面からは、刃長1.0～1.1cm、頸部長6.5～7.0+cmの長頸三角形鍬(1～5・7)が7点(報文では5点)、下面からは、刃長1.3～2.1cm、頸部長5.3+～6.8+cmの長頸腸扶長三角形鍬(8～13)が出土している。いずれの鍬も明瞭ではないが、棘状関を呈している。6世紀中頃と推定している。

富岡5号古墳(外山1972)(第4図47～49)

径約30mの円墳である。全長8.8m、玄室長4.3mの両袖横穴式石室である。副葬品は、装身具(ガラス丸玉・ガラス小玉・ガラス勾玉・銅地金張空玉)、半球形飾金具、武器・武具(小札甲・直刀・鍬)、馬具(雲珠・杏葉・鞍・素環鏡板付轡・絞具ほか)が出土している。須恵器杯蓋身が円筒埴輪列中から出土している。鍬は、無茎重扶長三角形鍬(47)が1点、長頸長三角形鍬(48)が10点以上ある。長頸鍬はいずれも棘状関を有するものである。須恵器はTK10型式並行期の新しい段階に比定される。

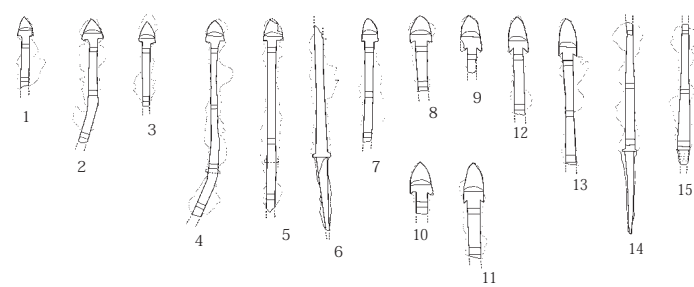
小型古墳例

伊熊古墳(尾崎1981)(第3図16～23)

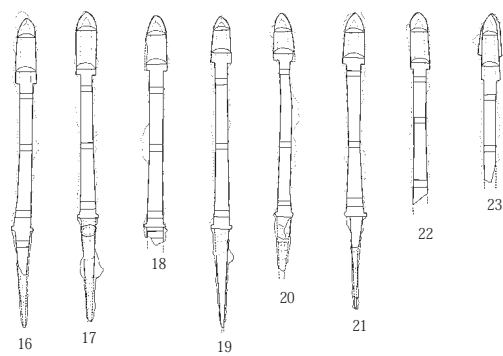
径8mの円墳で、全長4.2m、埋葬部長3.14mの無袖横穴式石室である。副葬品は、勾玉、直刀1、小刀1、刀子1と鍬8点が出土し、頸部が7.5～8.2cmの長頸長三角形鍬(16～23)が8点出土している。いずれも完全に長頸化を示す7cm以上の長さを有する頸部で、刃部の側線が直線状を呈するもので、明瞭な棘状関を持つ。短頸腸扶長三角形鍬を持たず、全て長頸化した棘状関を持つ鍬である。須恵器が短頸壺・小型直口壺・提瓶・甕・蓋杯が出土し、TK10型式並行期古段階に比定される。6世紀前半に比定されるものである。

有瀬II号古墳(石川1981)(第4図24～38)

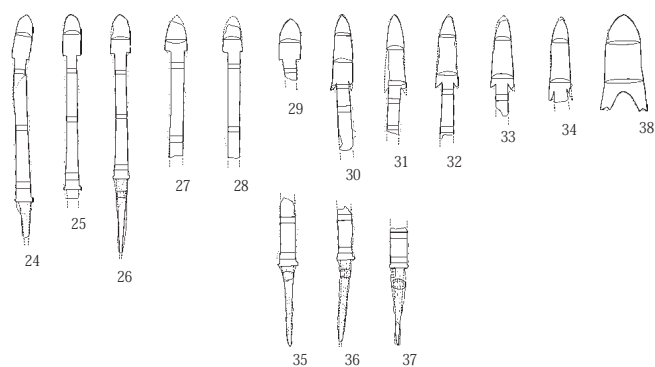
2段築成の径14mの円墳で、全長5.42m、埋葬部長



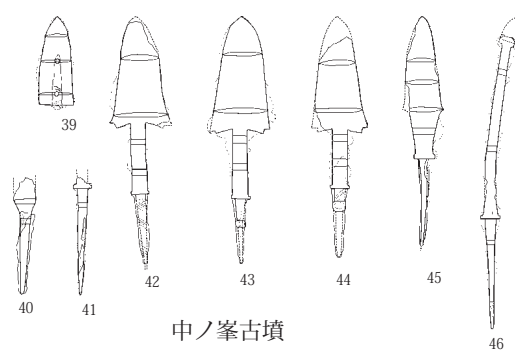
洞山古墳



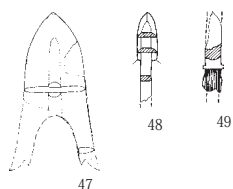
伊熊古墳



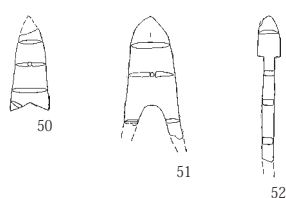
有瀬Ⅱ号墳



中ノ峯古墳



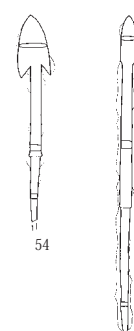
富岡5号墳



久保遺跡祭祀遺構



黒井峯遺跡



矢場前遺跡GH30号住

55

1～15 洞山古墳 16～23 伊熊古墳 24～38 有瀬Ⅱ号古墳 39～46 中ノ峯古墳
47～49 富岡5号古墳 50～52 久保遺跡祭祀遺構 53 黒井峯遺跡B138号畠
54・55 矢場前遺跡BH30号竪穴建物

第4図 鉄鏃の構成④〇

2.26mの無袖横穴式石室である。盗掘されていたが、副葬品は直刀、刀子と鏃12、須恵器・土師器が出土した。鏃は、頸部長6.6～7.5cmの長頸長三角形鏃(24～29)6点、頸部長3.6cm以上の頸部を持つおそらく短頸腸挟長三角形鏃(30～34)が5本、無茎平根重挟長三角形鏃(38)が1点である。6世紀前半の典型的な短頸腸挟長三角形鏃に、長頸長三角形鏃が入る時期である。いずれも短・長頸鏃には棘状関が弱いが確認できるものである。共伴する須恵器はTK10型式並行に比定されるものである。6世紀中頃に比定できるものである。

中ノ峯古墳(桜庭・松本1980)(第4図39～46)

径9mの円墳で、全長5.06m、埋葬部長3.07mの無袖横穴式石室である。副葬品は、装身具(勾玉・管玉・棗玉・切子玉・ガラス玉など)、武器(直刀・飾り弓(弓飾鉾))、工具(刀子)、須恵器が出土した。鏃は9点出土した。特徴的な斜関を有する圭頭状の有頸鉄鏃(45)1点、有頸で平根重挟長三角形鏃(42～44)3点があり、いずれも大型の平根鏃で特徴的である。無茎長三角形鏃(39)1点、頸部9.3cmを計る長頸三角鏃(46)が1点確認できる。以上の鏃全てに明瞭な棘状関が確認できた。須恵器類は横瓶と杯蓋が出土しており、TK10型式並行に比定される。以上の状況より6世紀中頃と推定する。この時期には確実に棘状関があったことを確認できる。

祭祀遺構

久保遺跡祭祀遺構(井上1987)(第4図50～52)

無・短茎鏃は、祭祀遺構では、金井東裏遺跡3号祭祀遺構に顕著に認められるように、祭儀使用の矢鏃としてよく使用されたものと推定している。無茎腸挟長三角形鏃(50・51)が3点あり、長頸長三角形鏃(52)が2点の計5点である。無・短茎鏃が中心となるのは、金井東裏遺跡3号祭祀遺構と久保遺跡、黒井峯遺跡B-138号畠が例となる。共伴する須恵器はTK10型式古段階に比定される。

黒井峯遺跡B138号畠(石井克己他1991)(第4図53)

IV群首飾りの家単位群中の、B-138号畠の西南の溝から無茎重挟・単挟長三角形鏃(53)が束ねられた状態で総計5本出土している。畠での矢鏃の出土にどのような意味があるのか推測するのは難しいが、壁邪のような意図を持って矢を配置したものと推定される。

集落遺跡

藤岡市矢場前遺跡BH130号住(田野倉・寺内2006)(第4図54・55) 平根腸挟長三角形鏃(54)と長頸長三角形鏃(55)と推定される鏃が出土している。6世紀前半に比定される。5世紀後半～6世紀中頃にかけて、長頸鏃の出土が多いが、6世紀後半以降になると、無・短茎鏃が多くなる。

5. 遺構種ごとの鏃の変遷状況(第5図)

古墳(大型・小型)、祭祀関連遺構、集落からの3種類の遺構群からの西暦500年を中心にして、5世紀後半か

ら6世紀中頃にかけての鏃の状況を記した。遺構種ごとの鏃の変遷を追い、その特徴について記す。

古墳(第5図1～62)

5世紀後半に行われた一斉の長頸鏃化の前段階である5世紀中頃の代表的な古墳として、大型前方後円墳として鶴山古墳がある。

鶴山古墳には、長頸化の初現を示すものとして、6.6～10cm以上と極端に長頸化した一群の長頸鏃が3種類(4～6)ある。兵庫県宮山古墳第2・3主体出土の長頸腸挟三角形も9cm以上の長頸化した鏃があり、初現期には極端な長頸化がなされた鏃があり、その流れに連なるものである。この段階の後に長頸腸挟片刃鏃がある。県内各地の古墳に一斉に導入され、その一例が普賢寺東古墳(7・8)であろう。頸部の残りが完全なものがほとんどないのではっきりと言うことはできないが、頸部長7cmという長頸鏃に比定すべき長さにある長頸腸挟片刃鏃が出土している。この普賢寺東古墳例以外に、大型前方後円墳の井出二子山古墳の一部の頸部の遺存の良い資料から、頸部長7cmを超えると想定される18点の長頸腸挟片刃鏃(11・12)が出土する。さらに古海原前1号古墳(22)・古海地内10番古墳(30・31)・本関町2号古墳(23・24)・白藤V-2号古墳(29)などから7.2～12.65cmの頸部長で出土している。構成する鏃の中ではいずれも中心的な位置を占めており、この時期を代表する長頸鏃となるものである。

無・短茎の逆刺を有する鏃群は、鶴山古墳から短茎腸挟長三角形鏃が5点(1)出土しており、この系統は白藤V-2号古墳から出土した短茎の重挟・単挟三角・長三角形鏃群8点(26～28)とつながるものである。

もう一つ特徴的なのは、平根で有頸の一群の鏃が出土することである。その例は大型墳の井出二子山古墳から2点(9)、古海原前1号墳からも11点の平根有頸鏃(20・21)が出土している。これら平根系の鏃と長頸鏃の刃部が大きいタイプとの区別は難しいが、古海原前1号古墳のようなタイプは祭祀遺構からの出土が数点あるものの極めて限定的に、この時期を中心にしか出土しないものである。

井出二子山古墳及び保渡田八幡塚古墳から出土した小型短頸、小型長頸鏃群は極めて特徴的な一群である。

井出二子山古墳(10)を初現として、特定の古墳のみに副葬され、特に保渡田八幡塚古墳からは小型の鏃群が12点(13～16・18)ほど出土している。このような小型薄手の一群の鏃は、大型墳であるこの2古墳からのみ出土している。小型化するという現象で言えば、小型農工具に通じる祭儀的な様子が強い鏃群と想定する。

6世紀に入ると大型古墳では、築瀬二子塚古墳と前二子古墳が初頭～前半にかけての代表である。この2古墳に共通するのは、短頸腸挟長三角形鏃(35・36)である。

頸部長3.7～5.15cmの間にあるもので、やや長めの長三角形の刃部に深い逆刺がつくものである。当鏃はこの2古墳ばかりではなく、小型古墳の四戸Ⅳ(41)・Ⅰ号古墳(49)、台所山古墳(50・51)、赤堀峯岸山漏17号墳(54)、有瀬Ⅱ号墳(73)から出土している。頸部長3.6+～6.0cmの間で、7cm未満で、長頸鏃とはいえないものである。この短頸腸挟長三角形鏃の中にも棘状関が認められる例が台所山古墳(50・51)にある。6世紀初頭～前半を代表する鏃群である。

また、築瀬二子塚古墳の薄手扁平な短頸長三角形鏃(33・34)や、前二子古墳の薄手扁平の長三角形鏃形品(38)などの、儀器化した鏃がやはり大型古墳に特徴的に出土する。この類例も注意すべきである。

6世紀前半～中頃にかけての大型古墳は、正円寺古墳が相当する。頸部が9.2cmを有し、棘状関を有する長頸長三角形鏃(65)が主体であるが、特徴的なのは、6世紀初頭を代表する短頸腸挟長三角形鏃(63・64)の小型化した一群で、すべて棘状関を持っているものである。鏃の小型化の系統は、井出二子山古墳及び保渡田八幡塚古墳にあるが、その流れがこの正円寺古墳に繋がっているものと想定される。

6世紀前半～中頃にかけて、小型墳でも、頸部の再度の長頸化が始まり、下郷71号古墳(60～62)、有瀬Ⅱ号古墳(73～75)、少林山台12号墳(46)などで頸部が7cmを超えるいわゆる長頸鏃が復活する。長頸鏃は、短頸の腸挟長三角形鏃が長頸化したものもあるが、主流は逆刺を持たない長頸長三角形鏃である。またこの類の長頸鏃に特徴的なのは棘状関を持つことである。少林山台12号墳(46)、有瀬Ⅱ号墳(75～77)などがある。下郷71号墳の中にも棘状関の可能性が認められるものがある。再度の長頸化と棘状関の出現は相関関係にある可能性が高い。

また、無・短茎鏃と長頸鏃の組み合わせが多くなるのもこの時期であり、四戸Ⅳ・Ⅰ号古墳(39～42・47～49)、少林山台12号古墳例(43～46)、赤堀村峯岸山漏17号墳例(52～55)があり、さらに6世紀中頃の壇塚古墳(66～68)や中ノ峯古墳例(78～81)から、6世紀後半以降も、無・短茎鏃と長頸鏃のセットはつながるものである。

6世紀中頃としては、先ほどの正円寺古墳は少し遡るものと想定し、小型だが前方後円墳の洞山古墳や、大型円墳の壇塚古墳や富岡5号古墳が代表例である。洞山古墳は、頸部長6.5～7.0+cmの長頸腸挟三角形(70・71)、長頸三角形鏃(69)が中心として出土し、いずれも棘状関である。富岡5号古墳はやはり、長頸長三角形鏃(83)が10点以上あり、無茎重挟長三角形鏃(82)が1点ある。大型円墳の壇塚古墳からは、長頸腸挟長三角形鏃が(68)1点出土している。長頸鏃にはいずれも棘状関がある。この時期の須恵器はTK10併行型式と推定され、この時期には確実に棘状関がついていたことが分る。また、無・短

茎鏃が、長頸鏃とのセットで埋葬されるのは、壇塚古墳や富岡5号古墳で確認されており、このセットが引き続いて行われていることを示している。

6世紀中頃の小型墳では、中ノ峯古墳があり、大型で平根の無茎重挟長三角形鏃(78)や、平根圭頭状の鏃(79)が特徴的で、頸部9.3cmを計る長頸三角(長三角)鏃(81)がある。無茎長三角形鏃以外は、すべての鏃に棘状関があり、この時期には棘状関が通有となっていたことが分るのである。

以上のように、5世紀中頃、長頸鏃が一端導入後、5世紀後半に、長頸腸挟片刃鏃が盛行した後に、5世紀末～6世紀前半にかけて、短頸腸挟長三角形の鏃群が盛行する。そのすぐ後に6世紀初頭～前半にかけて、長頸化に向けた動きが拡大して、7cm以上の長頸長三角形鏃が出始めて、6世紀中頃以降の鏃の祖型となるものである。棘状関は、6世紀前半に一部の鏃に採用されて、6世紀中頃にはほとんどすべての長頸鏃に採用されるもので、6世紀後半に引き継がれるものである。

大型古墳の井出二子山古墳を契機にして、鏃の小型化が進行して、正円寺古墳まで続き、小型化はここで終了する。一方、築瀬二子塚古墳や前二子古墳で特徴的な扁平薄手の仮器化が進むが、仮器化もここで終了する。

無・短茎鏃群は、古墳の副葬のセットとして、前期からあるが、前期では、柳葉鏃とのセットだったものが、5世紀中頃には、短頸・長頸鏃とのセットとなる。このセットは継続して7世紀まで続くものである。

祭祀遺構(第5図 85～103)

祭祀遺構では、5世紀後半～末に比定されるものに、金井下新田遺跡5区1号竪穴建物周堤内(89)と宮田諏訪原遺跡1区1号祭祀遺構(85～88)がある。宮田諏訪原遺跡のもので中心をなすのは、長頸腸挟片刃鏃(87)で、古墳での様相と同じである。無・短茎鏃群もいくつか出土しセットを構成している。独立片腸挟の鏃(88)が、すぐ後の時期の金井東裏3号祭祀遺構(96)、金井下新田遺跡5区6号遺構(90)からも出土しており、祭祀遺構での出土例が多く重要である。金井下新田遺跡5区1号竪穴建物周堤内出土の鏃(89)は、大型の長頸柳葉(長三角形)鏃で、6世紀中頃以降に盛行する鏃であり、先行しての出土として注目される。また、宮田諏訪原遺跡1区1号祭祀遺構や金井下新田5区4・6号遺構では、長頸鏃が構成の中心となる。

6世紀初頭の例として、金井下新田遺跡5区4号遺構、金井下新田遺跡5区6号遺構(90・91)、金井東裏遺跡3号祭祀遺構(92～96・98・99)は、Hr-FA降下直前のほぼ同時期の祭祀遺構である。これら祭祀遺構群で特徴的なのは大型の鏃を埋納することである。金井下新田遺跡4号・6号遺構でのほぼ同形同大の大型の平根有頸腸挟長三角形鏃(91)、及びやや形態は異なるが金井東裏遺跡3

号祭祀遺構からも大型の平根有頸腸挟長三角形鏃(99)が出土しており、大型化した鏃として祭具としての性格が示されたものとして注目される。なお、長頸系の鏃には棘状関は認められない。

金井東裏3号祭祀遺構は、183点の鉄器中、65点の鏃を出土し、鉄器中で一番多い比率を占めている。内訳は、無・短茎系が46%、平根系3%、長頸系28%、短頸系が4%である。無・短茎系が一番多く、この祭祀遺構での在り方を示している。長頸系がまだ短頸系より多いことは、短頸系に移行する前のまだ長頸系が主体の時期の様相を示している。また特徴として、長頸系で、この時期の主流である腸挟片刃鏃(94)も出土しているが、長頸腸挟長三角形鏃(97)が最多の出土を示しており、長頸腸挟片刃から長頸腸挟長三角形への移行を示しているものと考えている。また、無・短茎鏃、短・長頸鏃両方ともに小型化したものがいくつか含まれているのも特徴である。

6世紀前半～中頃の遺構として、黒井峯遺跡Ⅳ群単位群B-138号畠の南西溝中から出土した無茎重挟・単挟長三角形鏃(100)が5点出土している。久保遺跡では、やはり無茎腸挟長三角形鏃(101・102)が3点、長頸長三角形鏃(103)が2点出土している。

以上のように、古墳出土の鏃と比べると、特に金井東裏遺跡3号祭祀遺構に認められる様に、小型化したものがある程度認められるが、それはごく一部である。また、5世紀後半～末の宮田諏訪原遺跡1区1号祭祀遺構(85～88)や金井下新田遺跡5区4・6号遺構(90・91)のように長頸鏃を中心に構成するものと、6世紀初頭～中頃の金井東裏遺跡3号祭祀遺構(92～96・98・99)、黒井峯遺跡Ⅳ群単位群B-138号畠(100)、久保遺跡(101～103)の例のように、無・短茎鏃が祭祀で主に使用される2種類があることを示している。大型化した鏃が、金井下新田遺跡5区4号遺構、金井下新田遺跡5区6号遺構、金井東裏遺跡3号祭祀遺構から出土しており、祭具としての鏃の機能が示されていると想定している。

集落遺構(第5図 104～114)

前期から5世紀前半までは、無・短茎鏃(104～106)が多い。5世紀後半では、荒砥北三木堂遺跡Ⅰ区12号竪穴建物(110)・金井下新田遺跡1区6号竪穴建物・16号竪穴建物(108・109)から、いずれも長頸片刃鏃が出土している。長頸腸挟片刃鏃である可能性もあり、古墳出土と同じように、長頸片刃・腸挟片刃が主流となる。

5世紀末～6世紀初頭にかけての例としての内出Ⅰ遺跡9号竪建からは無茎腸挟長三角形鏃(112)が出土し、前期に多かった無茎鏃が出土している。

6世紀前半～中頃は、矢場前遺跡BH130号住から、平根腸挟長三角形鏃(113)と長頸長三角形鏃(114)と推定される鏃が出土している。

集落からは、前期～中期前半にかけて無・短茎鏃が多

数出土するのに比べると、5世紀後半から6世紀中頃にかけて長頸鏃の出土が多い。一部無・短茎鏃が出土するも、特に5世紀後半にかけては長頸鏃が目立って出土している。6世紀後半以降7世紀にかけても無・短茎鏃の出土が多いところを見ると、この5世紀後半は、通常住居で使用されていた、無・短茎鏃ではなく、当時最先端の鏃であった長頸鏃を使用していたと想定する。ただし、6世紀後半以降になるとまた無・短茎鏃の使用に戻ることが想定される。

6. 6世紀前後の鏃の全体動向

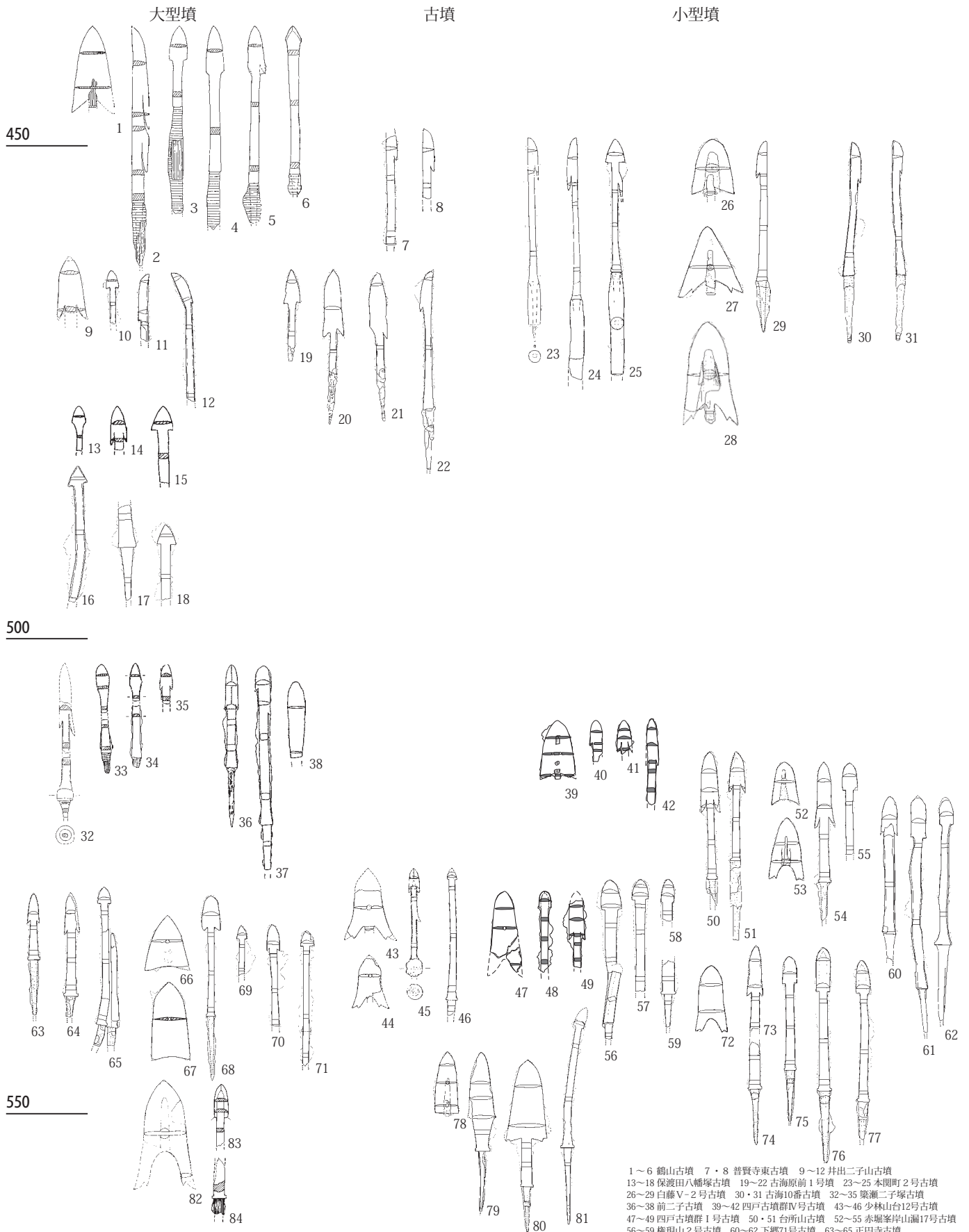
古墳からの出土鏃は、目まぐるしく変化し、5世紀中頃の長頸鏃の出現から5世紀後半の長頸腸挟片刃鏃の盛行、5世紀後半～6世紀前半にかけての特に大型墳を中心にした鏃の小型化、仮器化の傾向、6世紀初頭～前半にかけての頸部が短頸化した短頸腸挟長三角形鏃の盛行、6世紀前半の棘状関の出現、6世紀中頃の再度の長頸化による長頸長三角形鏃の盛行といった大まかな流れがあることが分かった。また、無・短茎鏃は前期から終末期まで、主要鏃とともに、セットの一部として構成される。大型墳と小型墳の副葬鏃の間には、先述した、大型墳出土鏃の小型化・仮器化は特徴的であるが、構成する鏃の形式数や数では多少の差異がある程度である。

祭祀遺構からの出土鏃は、5世紀後半～末の長頸鏃が中心に使用される場合と、6世紀初頭～中頃にかけての無・短茎鏃が中心に使用される場合があることが分かった。無・短茎鏃を中心に使用するの、古墳や当該時期の集落で中心に使用される鏃が長頸鏃である点と異なる。また一部大型化を示す鏃が6世紀初頭にあり特徴的である。

集落遺構からの出土鏃は、前期及び6世紀後半～7世紀にかけては、無・短茎鏃の使用が中心であるが、5世紀後半から6世紀中頃にかけては、長頸鏃の使用が認められ、この時期に長頸鏃導入とともに、集落出土鏃においても、一時的に長頸鏃使用が意識的に行われたことを示すものである。

おわりに

以上各種遺構ごとに鉄鏃の使用が異なることが分かり、特に6世紀前後に、古墳出土の鏃の一部に、小型化・仮器化する動き、祭祀遺構出土の鏃の一部に大型化の動きがあることは鏃の祭具としての役割を良く示すものと想定される。出土遺構の性格及びその変化に合せた鉄鏃の選択が行われていたことが分るのである。

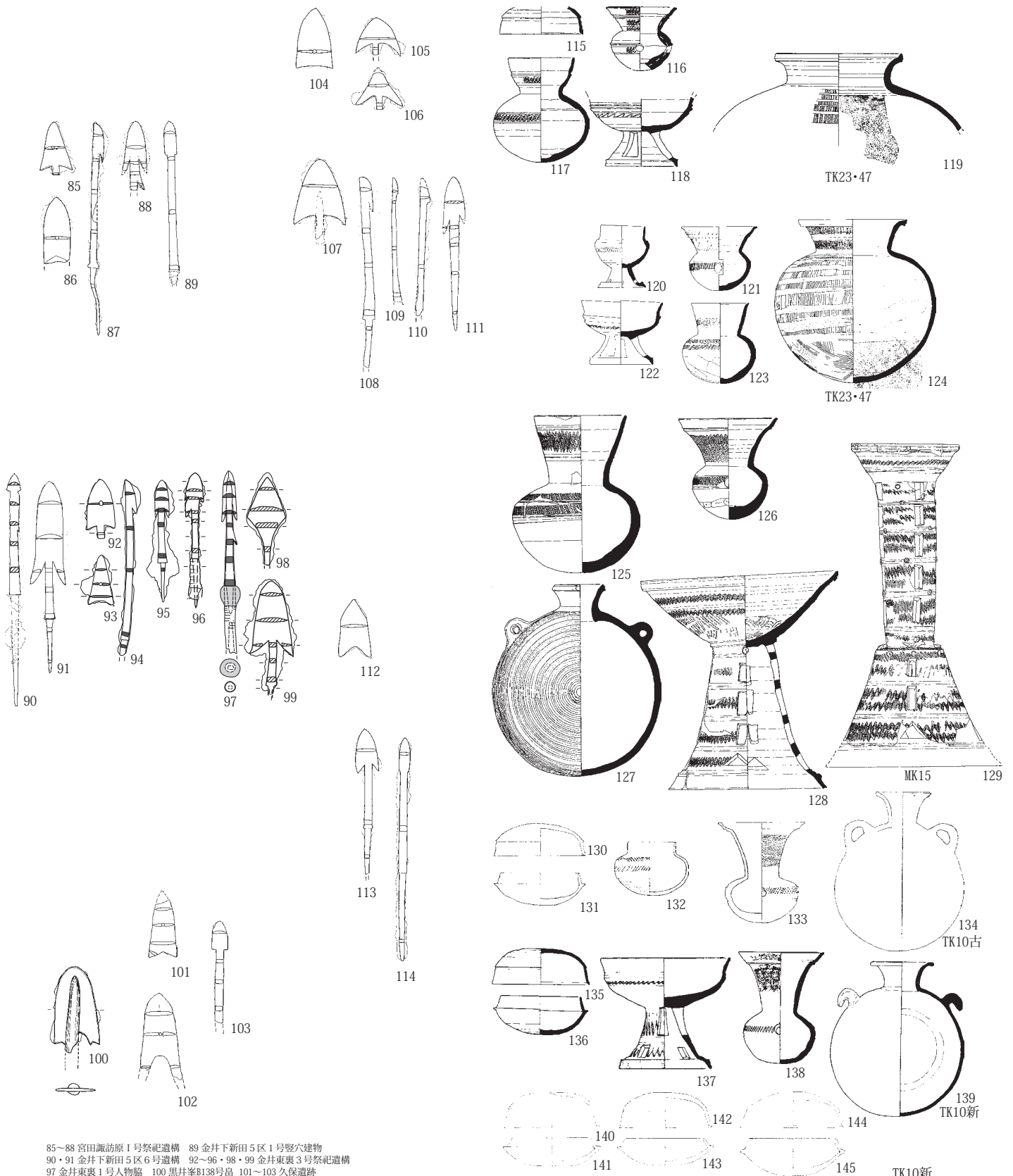


第5図 鉄鍔の変遷①(5世紀後半～6世紀中頃)

祭祀遺構

集落

共伴須恵器



85～88 宮田諏訪原1号祭祀遺構 89 金井下新田5区1号竪穴建物
90・91 金井下新田5区6号遺構 92～96・98・99 金井東裏3号祭祀遺構
97 金井東裏1号人物脇 100 黒井峯B138号苗 101～103 久保遺跡
104 菅野遺跡47号土坑 105 柳久保遺跡H53号竪穴建物
106 人見枝谷H62号竪穴建物 107 寺谷II遺跡17号竪穴建物
108 金井下新田1区16号竪穴建物 109 金井下新田1区6号竪穴建物
110 荒砥北三木堂遺跡I区12号竪穴建物 111 金井下新田遺跡5区22号竪穴建物

112 内出遺跡9号竪穴建物 113・114 矢場前遺跡H130号竪穴建物
115～119 井出二子山古墳 120～124 金井東裏3号祭祀遺構
125～129 前二子古墳 130～134 伊熊古墳
135～139 久保遺跡 140～145 富岡5号古墳

第5図 鉄鐻の変遷②(5世紀後半～6世紀中頃)

お世話になった人々・機関

かみつけの里博物館・群馬大学教育学部・東京国立博物館・安中市教育委員会・伊勢崎市教育委員会・渋川市教育委員会・高崎市教育委員会・前橋市教育委員会・蓮神社

新井啓泰・岩崎輝夫・河野正訓・清水豊・大工原豊・萩原俊樹・原佳子・藤森健太郎・古谷毅・前原豊・横沢真一

註

註1 漁具の可能性も考慮したが、明瞭な茎を形成するものがあることなどから、鎌と判断している。

参考文献

飯塚誠・徳江秀夫 1993『少林山台遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
石井克己ほか1991『黒井峯遺跡発掘調査報告書』子持村教育委員会
石川正之助 1981「有瀬2号古墳」『群馬県史』資料編3古墳 群馬県史編さん委員会 pp.406-413
石川正之助・右島和夫1986「鶴山古墳出土遺物の基礎調査Ⅰ」『群馬県立歴史博物館調査報告書』第2号
石坂茂ほか 1991『荒砥北三木堂遺跡Ⅰ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
石関伸一・橋本博文1986『古海原前古墳群発掘調査概報』大泉町教育委員会
石丸敦史・関本寿雄2012『古海地内10番古墳』大泉町教育委員会
伊藤廉倫ほか 1992『前畑遺跡・内出Ⅰ遺跡・丹生城西遺跡・五分一遺跡・千足遺跡』山武考古学研究所・富岡市教育委員会
井上太 1987「久保遺跡」『富岡市自然編原始・古代・中世編』富岡市 pp.245-257
大塚昌彦・石井克己 2016『下郷古墳群71号墳』東吾妻町教育委員会
尾崎喜佐雄 1950「群馬県粕川村壇塚古墳調査報告」『群馬大学紀要一人文学篇』第1巻 群馬大学
尾崎喜佐雄 1951「赤堀村洞山古墳発掘調査概報」群馬大学尾崎研究室
尾崎喜佐雄 1958「壇塚古墳」『勢多郡誌』勢多郡誌編さん委員会 pp.228-229
尾崎喜佐雄 1971「正門寺古墳」『前橋市史』前橋市 pp.301-304
尾崎喜佐雄 1981「伊熊古墳」『洞山古墳』『群馬県史』資料編3古墳 群馬県史編さん委員会 pp.398-402, pp.669-673
小島純一 1989『白藤古墳群』粕川村教育委員会
小島敦子・原雅信・桜岡正信ほか2021『金井下新田遺跡《古墳時代以降編》』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
小林修2005『宮田諏訪原遺跡Ⅰ・Ⅱ』赤城村教育委員会
桜庭一寿・松本浩一 1980『中ノ峯古墳発掘調査報告書』子持村教育委員会
杉山秀宏 2011「群馬県古墳出土鉄鏃について」pp.991-104
—前期～中期中頃の鉄鏃—『研究紀要29』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
杉山秀宏 2016「副葬品からみた築瀬二子塚古墳—鉄製品を中心に—」『築瀬二子塚古墳の世界』安中市学習の森ふさと学習館 pp.82-89
杉山秀宏・大木紳一郎ほか2019『金井東裏遺跡《古墳時代編》』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
杉山秀宏 2020「四戸古墳群について—群馬大学調査資料の紹介—」『研究紀要38』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.67-86
杉山秀宏 2021「祭祀関連遺構出土の鉄器について」『金井下新田遺跡《古墳時代以降編》分析・論考編』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.191-212
関本寿雄2016『古海原前1号古墳 遺構・遺物写真図録』大泉町教育委員会

大工原豊・志村哲 2003『築瀬二子塚古墳・築瀬首塚古墳』安中市教育委員会

田野倉武男・寺内敏郎 2006『矢場前原遺跡』藤岡市教育委員会

外山和夫 1972『富岡5号古墳』群馬県立博物館

中里正憲 2011『本関町古墳群』伊勢崎市教育委員会

藤岡一雄1969「四戸古墳群」『昭和三九・四〇年度における発掘調査』群馬大学尾崎研究室調査報告第三輯

藤岡一雄1981「四戸古墳群」『群馬県史』資料編3古墳 pp.520-532

群馬県史編さん委員会

藤野一之 2019『古墳時代の須恵器と地域社会』六一書房 pp.45-57

前原豊 1993『前二子古墳』前橋市教育委員会

前原豊・杉山秀宏他 2015『東アジアから見た前二子古墳記録集・資料集』前橋市教育委員会 pp.103-197

松村一昭 1976『赤堀村峯岸山の古墳2』赤堀村教育委員会

松本浩一 1981『群馬県史』資料編3古墳 群馬県史編さん委員会

村井嵩雄・本村豪章 1983『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇(関東Ⅰ) 東京国立博物館

横澤克明 1981『権現山2号古墳』『群馬県史』資料編3古墳 群馬県史編さん委員会 pp.597-607

右島和夫1987-1990・1996「鶴山古墳出土遺物の基礎調査Ⅱ～Ⅵ」『群馬県立歴史博物館調査報告書』第3～7号

右島和夫 1999「普賢寺東古墳」『高崎市史』資料編1高崎市 pp.707

若狭徹・石橋宏2009『井出二子山古墳』高崎市教育委員会

若狭徹2000『保渡田八幡塚古墳』群馬町教育委員会

挿図出典

第1図

1～10 杉山2011より 11～12 群馬大学にて実測
13～23 若狭・石橋2009よりトレース 24～30 若狭2000よりトレース
31～36 関本2016より 37～39 石丸・関本2012より
40～42 中里2011より一部改変トレース

第2図

1・7・8 小島・原・桜岡他2021より 2～5 小林2005より
6 石坂1991より 7～14 大工原・志村 2003より 15～17 前原・杉山他2015より 18～25,26～29 杉山 2020より 30～40 群馬埋文事業団にて測図、トレース 41～43 東京国立博物館にて測図、トレース 45～54 伊勢崎市赤堀歴史民俗資料館で測図、トレース
55～59 蓮神社にて測図、トレース 60～65 大塚・石井 2016より

第3図

1～5 小島・原・桜岡他2021より 6～15 杉山・大木他2019より 16 伊藤他1992より 17～68 群馬大学にて測図・トレース

第4図

1～14 群馬大学にて測図・トレース 15～22 渋川市教委で測図・トレース 23～25 外山1972より改図 26～28 井上1987より改図
29 石井1991より 30・31 田野倉・寺内2006より

第5図

115～119 若狭・石橋2009より 120～124 杉山・大木他2019より
125～129 前原・杉山他2015より 130～134 尾崎1981より
135～139 井上 1987より 140～145 外山1972より